

次の古文を読んで、あとの問いに答えなさい。

汀に立ち上がらんとするところに、おし並べてむす組んでどうと落ち、とつておさへて首をかかんと甲をおしあふのけて見れば、年十六七ばかりなるが、薄化粧して、かねぐるなり。わが子の小次郎がよほひほどにて、容顔まことに美麗なりければ、いづくに刀を立つべきともおぼえず。

「そもそもいかなる人にてましまし候ふぞ。名のさせたまへ。助けまゐらせん。」と申せば、

A 「なんぢはたそ。」と問ひたまふ。

「物そのもので候はねども、武蔵の国の住人、熊谷次郎直実。」と名のり申す。

「さては、なんぢにあうては名のるまじいぞ。なんぢがためにはよい敵ぞ。名のらずとも首をとつて人に問へ。見知りしするぞ。」とぞのたまひける。

熊谷「あつばれ、大將軍や。この人一人討ちたてまつたりとも、負へべきいくさに勝つべきやうもなし。また討ちたてまつらずとも、

勝つべきいくさに負くることもよもあらじ。小次郎が薄手負うたるをだに、直実は心苦しうこそ思ふに、この殿の父、討たれぬと聞いて、いかばかりか嘆きたまははずらん。あはれ助けたてまつらばや。」と思ひて、後ろをきつと見ければ、土肥、梶原五十騎ばかりで続いたり。熊谷涙をおさへて申しけるは、

B 「助けまるらせんとは存じ候へども、味方の軍兵、雲霞のごとく候ふ。よものがれさせたまはじ。人手にかけまるらせんより、同じへは、直実が手にかけまるらせて、後の御幸養をこそつかまつり候はめ。」と申しければ、

「ただとくとく首をとれ。」とぞのたまひける。熊谷あまりにいとほしくて、いづくに刀を立つべしとおぼえず、目もくれ心も消えはてて、前後不覚におぼえけれども、さてしもあるべきことならねば、泣く泣く首をぞかいてんげり。

問1 a 「助けまるらせん。」 b 「見知らずするぞ。」を現代仮名遣いに直し、全てひらがなで書きなさい。(1点×2)

問2 ①「いづくに刀を立つべしとおぼえず。」のよう感じたのはなぜですか。その理由を現代語で、四十字以内で説明しなさい。(4点)

問3 ②「なんぢ」、④「この人」は誰のことですか。最も適切なものを、次のア～オの中からそれぞれ一つずつ選び、記号で答えなさい。(2点×2)

- ア 熊谷次郎直実 イ この殿(敦盛) ウ 小次郎 エ (この殿の)父 オ 土肥・梶原

問4 会話文A・Bは、誰が言ったものですか。最も適切なものを、次のア～オの中からそれぞれ一つずつ選び、記号で答えなさい。(2点×2)

- ア 熊谷次郎直実 イ この殿(敦盛) ウ 小次郎 エ (この殿の)父 オ 土肥・梶原

問5 ⑤「味方の軍兵」の様子を具体的に表している部分を本文中からさがし、はじめの五字を書き抜きなさい。(句読点を含む)(2点)

問6 ⑥「人手」と反対の意味に用いられている言葉を本文中からさがし、答えなさい。(2点)

問7 ⑦「とぞのたまひける」の助詞「ぞ」と文末の「ける」のよな関係を何と言いますか。(2点)

問8 ⑧「泣く泣く首をぞかいてんげり」を、誰の行動かわかるようにして、二十字程度で現代語訳しなさい。「書くこと」(4点)

問9 この文章で「敦盛」はどのような武士として描かれていますか。最も適切なものを、次から一つ選び、記号で答えなさい。(2点)

- ア 自分の命を考えない無謀な武士 イ 敵と戦おうともしない弱い武士 ウ 命をいをしないいさぎよい武士 エ 父のことを考えない親不孝な武士

問10 右の古文の(書名)、書かれた時代、作品の種類を漢字で正確に書きなさい。(2点×3)

Table with 10 columns (問1-10) and 4 rows (1-4) for handwritten answers. Includes a small table for book information on the left.

二 次の文章を読んで後の問いに答えなさい。

。沙羅双樹の花の色、盛者必衰の理をあらはす。おこれる人も久

祇園精舎の鐘の声、

しからず、ただ春の夜の夢のごとし。たけき者もつひには滅びぬ、ひとへに風の前の塵に同じ。

問1 「」に入る言葉を書きなさい。漢字でもひらがなでも良い。

問2 「盛者必衰」とはどういう意味か。説明しなさい。

問3 人間の運命のはかなさを何と何に例えているか。それぞれ五字で古文から書き抜きなさい。

① 汀にうち上がらんとするところに、おし並べてむすど組んでどうど落ち、とつておさへて首をかかんと甲をおしあ

ふのけて見ければ、年十六七ばかりなるが、薄化粧して、かねぐるなり。わが子の小次郎がよはひほどにて、容顔まことに美麗なりければ、いづくに刀を立つべしとおぼえず。

「そもそもいかなる人にてましまし候ふぞ。名のらせたまへ。助けまゐらせん。」

と申せば、

「なんぢはたぞ。」

④ と問ひたまふ。

「物そのもので候はねども、武蔵の国の住人、熊谷次郎直実。」

⑤

「なんぢがためにはよい敵ぞ。名のらすとも首をとつて人に問

と名のり申す。

⑥

とぞのたまひける。

「B」熊谷、「あつばれ、大將軍や。この人一人討ちたてまつたりとも、負くべきいくさに勝つべきやうもなし。また討ちたてまつらずとも、勝つべきいくさに負くることもよもあらじ。小次郎が薄手負うたるをたに、直実は心苦し

⑦

うこそ思ふに、この殿の父、討たれぬと聞いて、いかばかりか嘆きたまはんずらん。あはれ助けたてまつらばや。」

と思ひて、後ろをきつと見ければ、土肥、梶原五十騎ばかりで続いたり。熊谷涙をおさへて申しけるは、

⑧

「助けまゐらせんとは存じ候へども、味方の軍兵、雲霞のごとく候ふ。よものがれさせたまはじ。人手にかけまゐらせんより、同じくは、直実が手にかけてまゐらせて、後の御孝養をこそつかまつり候はめ。」

と申しければ、

「ただとくとく首をとれ。」

とぞのたまひける。⑨

熊谷あまりにいとほしくて、いづくに刀を立つべしとおぼえず、目もくれ心も消えはてて、前後不覚におぼえけ

⑩

れども、さてしもあるべきことならねば、泣く泣く首をぞかいてんげる。

「あはれ、弓矢とる身ほど口惜しかりけるものはなし。武芸の家に生まれずは、何とてかかる憂きめをばみるべき。情けなうも討ちたてまつるものかな。」

とかきくとき、袖を顔に押しあててさめざめとぞ泣きあたる。やや久しうあつて、さてもあるべきならねば、鍔直垂をとつて、首を包まんとしけるに、錦の袋に入れたる笛をぞ、腰にさされたる。

「あないとほし、この暁、城の内にて管絃したまひつるは、この人々にておはしけり。当時味方に、東国の勢何万騎かあるらめども、いくさの陣へ笛持つ人はよもあらじ。上臈は、なほもやさしかりけり。」

とて、九郎御曹司の見参に入れたりければ、これを見る人、涙を流さずといふことなし。

⑪

後に聞けば、修理大夫経盛の子息に大夫教盛とて、生年十七にぞなられける。

それよりしてこそ熊谷が発心の思ひはすすみけれ。

問4 ——線部④「問ひたまふ」⑤「なんぢ」を現代仮名遣いになおして、すべてひらがなで書きなさい。

問5 ——線部①「汀にうち上がらん」⑦「嘆きたまはんずらん」⑩「かいてんげる」の主語を次から選び、

記号で答えなさい。

ア 熊谷次郎直実 イ 小次郎 ウ 父 エ 平教盛 オ 味方の軍兵

問6 ——線部③「なんぢはたぞ」⑨「いとほしくて」を口語訳しなさい。

問7 【A】は、誰が言った言葉か、名前で答えなさい。

問8 ——線部⑧「雲霞」の読みを書きなさい。

問9 ——線部⑩「生年十七にぞなられける」に使われている表現技法を答えなさい。

問10 【B】熊谷、「あつばれ大將軍や」あはれ助けたてまつらばや。」とあるが、ここで熊谷がその武者を助けようと思ったのはなぜか。熊谷の言葉から二つ読みとり、現代語でわかりやすく書きなさい。

問11 若武者が笛を指しているのを見て、熊谷はどう思ったか。その部分を文中から探し、現代語で書きなさい。

